

越廻の風位考

青木捨夫

はしがき

風と帆、舟と波、その闘いは古く、その戦いに勝つことが水産業によって生計を立てる唯一の道であり、村民の生死と榮枯盛衰の鍵であった。その舟が、風と波に融和することによって現在の越廻村が発展し存在した。田畠に恵まれない越廻村蒲生・茱崎、数百年の歴史はこの中から綴られてきた。海によって得られる生活の糧は漁業であり海運業であった。

現在（昭和51年3月）越廻村の世帯数654そのうち蒲生茱崎の世帯数439　此の蒲生茱崎の世帯のうち、漁業によって生計を立てるもの50余世帯、昭和14年の漁船数266隻に対し昭和51年の漁船総数77隻（共に下岬地区を除く）既に漁業は越廻村の根幹産業の王座を失い、漁獲量の大小によって村経済の浮沈がきまった時代は昭和30年代末で終っている。とは言へ、村民の気質は長い水産業の伝統によって育くまれ、水産業の歴史によって築かれて來た。その習俗は現実に今も生き、衰えたとは言へ茱崎を中心として他の区に於ても漁獲量の大小が活気となって村経済の一翼を担っている事実は否めない。

櫓と櫂による操船と帆走はやがて焼玉機関（セミディーゼル）となり、更にディーゼル機関にと移り変わることにより、風位・風速が船体に著しく影響を及ぼしそれを考慮する事が1人前の漁師としての心要条件であった時代も過ぎ去ってしまった。レーダと気象通報の理解・無線電信機・魚群探知機の高度な活用こそ1人前の漁師としての必要条件となってきた。この発達は、雲行きで風向と風速を判断しこれに気温とアネロイド晴雨計の針の動きを加味して漁場を選定する総合判断もこの判断の正誤が、漁獲量のみならず、舟板1枚下は地獄という生命の賭という厳しい自然との対決も失わせた。機器の発達や木造からプラスチックへの船体材質の進歩は、漁師の空を見上げる習慣を失わせつつある。人智は今科学に置きかえられつつある。だが、すべてが科学機器に置きかえられたわけではない。小型船舶には矢張り人智、祖先が生活の智恵からあみ出してくれた風位と気象判断の資が今も受け継がれ活用されている。

越廻村の地形からのみ通用する天気と波浪関係の俚言や風位の表現は、漁業者のみに適する言葉のニュアンスとなって生き続けている。

越廻村の漁業・海運業の推移

藩政時代の越廻村海運の記録は、福井県史（福井県）丹生郡誌（丹生郡誌編集委員会）日本海海運史の研究（福井県立図書館）その他の著書で見ることはできない。しかし、蒲生から「北海道航路運搬船」が発着し、松平藩の許可を得て酒を醸造し新潟米が用いられたという記録、三国・敦賀港と小廻り船で物産の移出入交易のあった記録が越廻村の古文書として保管されており、伝説に

残されている。また、松平藩（福井藩）へ「お寒鶴」（おかんだら）の献上から、蟹漁・鰐のつけ場の記録、北海道と「いかつり漁法」の交流が江戸時代からあり、明治以降では、6人乗りの和船を操って行った「いわし網漁」或は丹後（京都府）沖合、大島小島付近で行った「かれいの底刺」延縄・手操網の伝説は数多残されている。

これら遠海の航路・操業はすべて自然の風力と人間の体力とでなされてきた。

因に越廻村（蒲生・茱崎・大味）の漁船の推移を示す。

年 次	昭 1	昭 5	昭 10	昭 14	昭 24	昭 29	昭 51
無動力	208	168	228	241	54	103	—
動 力	4	15	9	25	61	66	76
計	212	183	237	266	115	169	76

蒲・茱

昭51年の動力船のうちディーゼル機関22隻が沖合漁業で残54隻は船外機の動力とした近海（沿岸漁業）或はレジャー用である。

子・丑・と十二支で現した藩政時代からの羅針盤やNSで現した昭和の羅針盤が唯一の針（方位）であり、山の形、山と森の重なりで漁場を確めて網を刺し釣糸をおろした操業と地文航法は想像も出来ない程の体力と気力と智力を必要とした。

舟は帆まかせ、風まかせという物見遊山の船旅でなく、越廻の間（舟揚場）から遠く異郷の港に落される（入港する）事も日常茶飯事であったし、強風波浪にもて遊ばれ帰りつく術もなく幾多の人命を失う事も多かった。今日は人を助ける身であっても明日は助けられる身となる災難がふりかかるとなれば、自分の身を自分で守る最善の策が風位・風力と波浪に関する知識と体験と判断力であった。

風位と方位の差

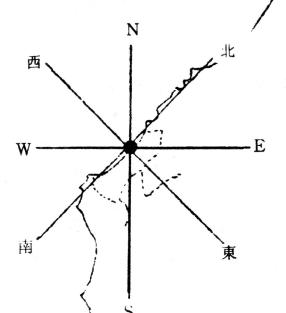
風位と方位とは同じではない。即ち北方より吹いてくる風が北風と呼び、矢羽根で示されるのは現代の気象学であり、北方より吹いてくる風がアイノカゼであって北風ではない。これが漁師の用いる風位である。アイノカゼは北風ともいえるから同一視しがちであるが必ずしも同一ではないということである。

越廻村蒲生茱崎の風位

アルファベットは磁針の方位であり、漢字は漁師の用いる風位である。

此の場合でも東・西・南・北の風とは言はず特殊な呼び方をして

1. 風位（概略の方位）を表わす。
2. 風力をあらわす。



3. 天気のうつりかわりを表わす。
4. 波浪の変化と将来への見通しを表わす。

これらの意味を含めた呼び名が風位であると考えられる。

越廻の風位

気象予報・漁業機器が漁船に取り入れられ略完備する迄、即ち風位依存の漁業形態であった昭和30年末まで用いられた主体を置いた名称である。

要約すれば下記のようになる。

越廻の漁業者が用いている風の名前

青木捨夫編、越廻の風位考より

北												
北東	北東	北東	北西	北西	北西	北西	北	北	北	北	北	方位
アマウチモン	シモイソ	デヤマセ	シモシラバ	シモダカ	タバカチ	シモオキゲ	シモゲ	シモカゼ	ヨウマ	マカゼ	アイノカゼ	風位名
南												
南西	南西	南西	南西	南西	南西	南西	南東	南	南	南	南	南
ワカサ	カミシラバ	シカタ	カミオキゲ	カミダカ	カミニン	カミニソ	ガスクダリ	ツルガモン	マクダリ	アマクダリ	カミカゼ	クダリ
西												
西	西	西	西	西	ニシ		東	東	東	東	南	
シラバ	オキゲ	タカカゼ	マニシ				デカゼ	ダシ	アラシ	イソゲ	ヤマセ	オキナガス
東												

古来、風位と方位は同一でなかったが、漸次、風位と方位が同一化して用いられるようになってきた。このことは、機器の発達・導入と深い関係があり、一過渡期ともいえよう。

越廻の風位説明と全国風位との関係

1. 北方よりの風

北												方位
北東	北東	北東	北西	北西	北西	北	北	北	北	北	北	風向
アマウチモン	シモイソ (下磯)	デヤマセ (出山背)	シモシラバ	シモダカ (下高)	タバカゼ	シモオキゲ (下冲げ)	シモゲ	シモカゼ (下風)	ヨオマ	アイノカゼ	マカゼ (真風)	風位名
初秋	秋夏	秋冬		春秋	秋冬	夏		年中	年春夏	年中	年中	季節
	九月									八二 ・月 九月		月
						タバカチ	シモオッケ	下風 ・北風のこと			アイノカゼ	アイノマカゼ
												風位別名

マカゼ

まっすぐ真北より吹いてくる風「アイノマカゼ」とも呼び、大船の航行に適している。

アイノカゼ

2月春先とか、8・9月初秋に吹く風で、敦賀祭（氣比神宮例祭9月4日）頃に吹き、氣比神宮の神が敦賀港へ船を呼び集められる風という伝説がある。この風が吹くと、時化る事もあるが1年中を通して出漁できる日が多い。雨量は少ない。アイナオリになると沖が時化る。エノカゼともいいヨオマよりも強い風。海より神様が寄ってこられる風で、蒲生氣比神社の神（宝暦11年2月4日）大味八幡神社、境内社春日神社の神（元和の頃）居倉春日神社、脇神75体様と寄神の伝説が多く、柳田国男集の中にも又、能登寄り神と海の村（日本放送協会編）と共に通する点が注目される。更に、人に禍事を起こす禍神となられた当村神社の神に「海へお流ししますぞ」というと和神となれるという伝説も興味深い。2月6日、小正月の訪れ人アッポッシャの習俗も残る。

ヨオマ

「朝 シカタ 入リヨオマ」という方言（俚言）がある。朝は南風で夕方に北風になる風の変

り方で、此の状態の時は 10 日に 8 日は冲が凪ぐ事を表わしている。春に吹く微風で雨は降らない。大変よい漁業天気で、帆走によい。アイノカゼよりも弱く、シモカゼ程度である。シカタ(南風)よりイリカゼ(西風)になってヨオマ(北風)に変わるのが越廻の一般的な天気の移り変りがあるが、季節によって微妙な変化がある。

シモカゼ

下風と書く。越廻村では、南をカミ(上)北をシモ(下)と呼び、茱崎区の北の部をシモデ、南の部をカミデ、蒲生区の北の部をキタデ、南の部をムナンデと呼ぶことや町村合併まで上岬・下岬両村のあった事と併せ考えると面白い。アイノカゼとよく似ている北風で微風。

シモゲ

下風の別称である。注意すべきは、シモカゼのことをクダリ(下り)とは言わない。クダリとは南風のことである。

シモオキゲ

夏の風の無い日とか微風である。北西(下の沖 シモのオキ)から吹き、肌ざわりが良く凪が良い。シモオキゲをシモオッケとも呼び、春のかすみのかかる頃から吹き始める。吹く方向によって、シモオキゲ、カミオキゲ(上沖げ)と表わされる。

タバカゼ

初秋から吹く強い北西風である。この風が吹くと海は大時化となる。今日はいくら天気が良く波一つ立たないベタ凪(方言)であっても、雲の流れ具合から「明日はタバカゼ(タバカチ)やぞ」と言へば、大時化になるぞという意味を持っている。初秋から冬にかけ大時化に急変させるこの風をうらんでか「風がタバカル(嘘をつく)」ことからタバカゼとついたと思っている人も多い。しかし東風と書き能登の風位(享保 3 年 - 1718 加賀藩調査)にも記されている事から此の意味は当らない。柳田国男集風位考にあるタマカゼの呼び名は越廻にはない。また、死靈にまつわる伝説も残っていない。「春のタバカゼ、ヘイシタから凪ぐ」という俚言がある。春のタバカゼはいくら吹いても磯の方から凪ぎ明日は沖へ出られるという意味で、反対に「秋のタバカゼ、ドスになる」俚言もある。

シモダカ

タバカゼに比して吹き方の弱い北西風である。春秋のうち秋に多く、晩夏より吹き始める。風の割に白波が立ち、凪ぎそうで凪にならない風である。うねりも高く出漁できる日が少ない。晩秋になるにつれて風波が強まり時化が多い。アイタバカゼと呼ぶこともある。

シモシラバ

オキゲよりも強い風で出漁できない。

アマウチモン

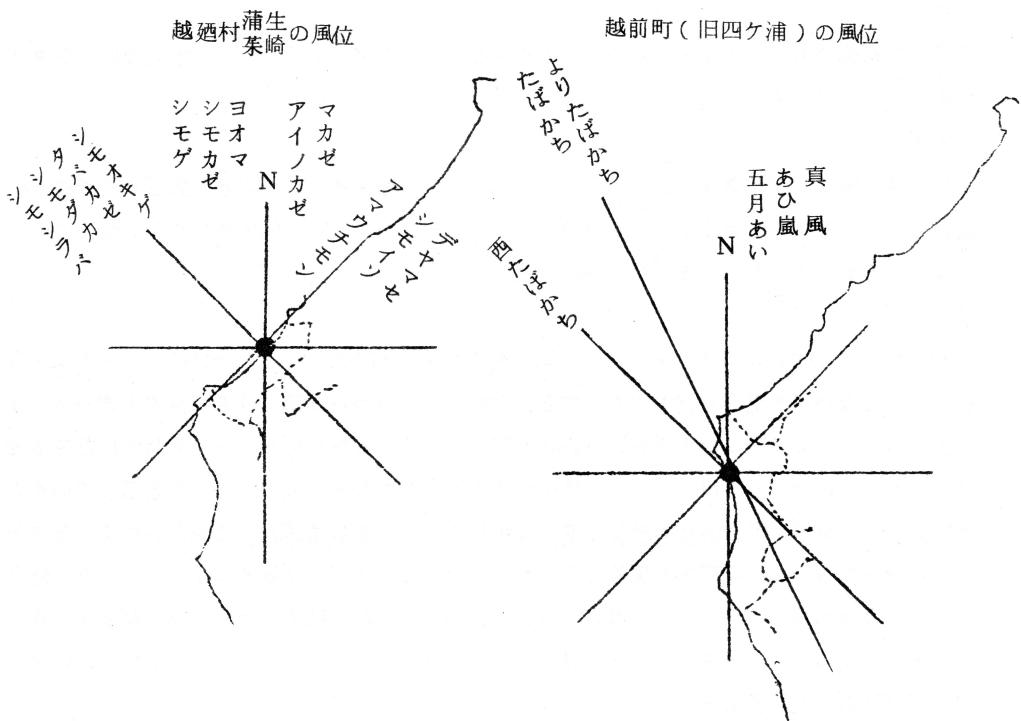
210 日頃(9月)に吹く北東風である。朝アマウチモンが吹いて午後 2 時頃ワカサ(南西風)が吹いたら風は強まり波も高くなる。時化の前徴であるから油断するな。

デヤマセ

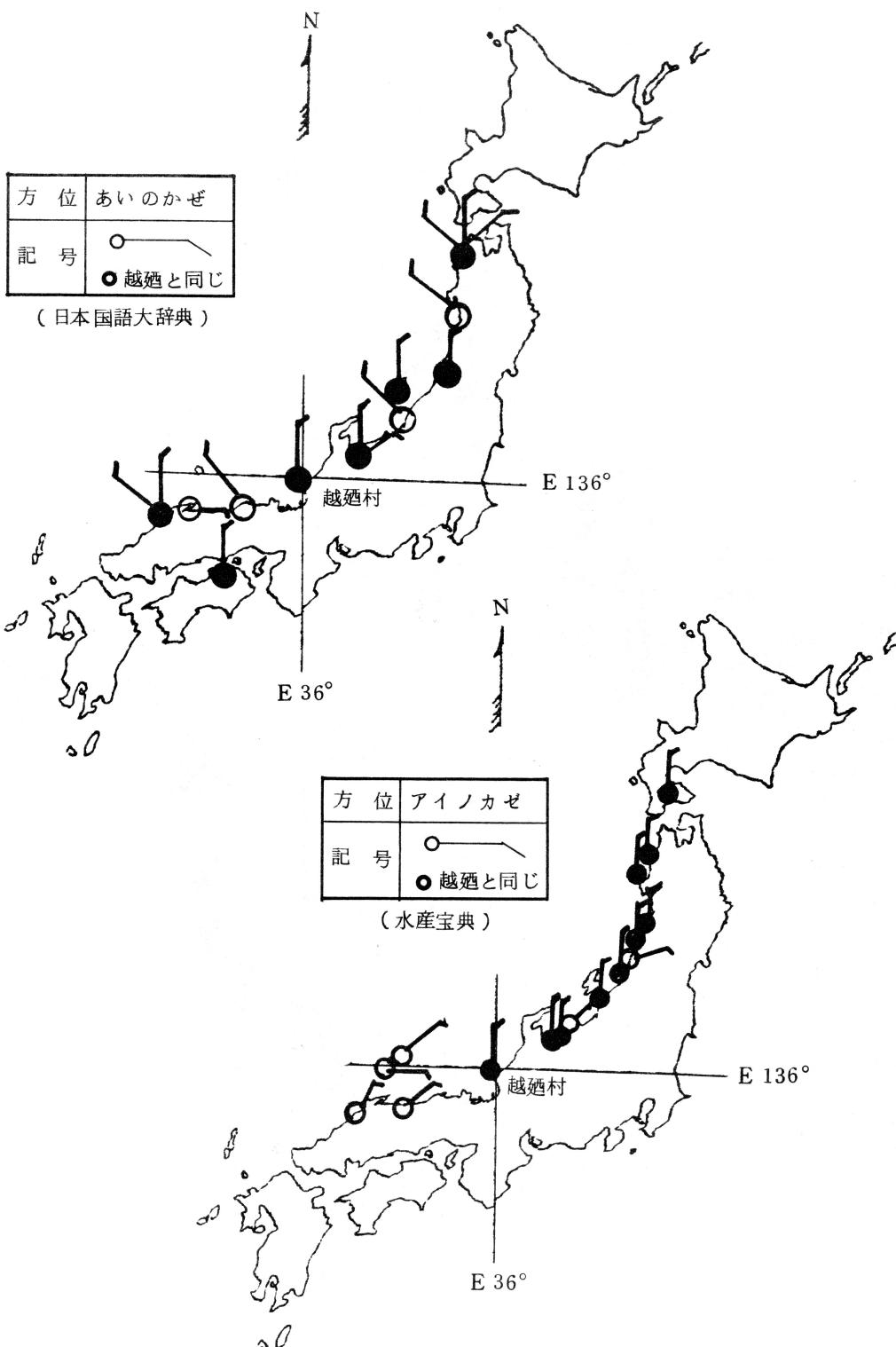
秋から冬にかけて吹く北東風で、海面にホケ（風の為波頭が水しぶきになって空中に舞い上がる）が立つこともある。始めは波もうねりも無いがやがてうねりのでてくる風である。夏から秋にかけてのデヤマセは磯（海岸部）では波はないが、沖の方に風があり波がある。小舟は出漁できない。

シモイソ

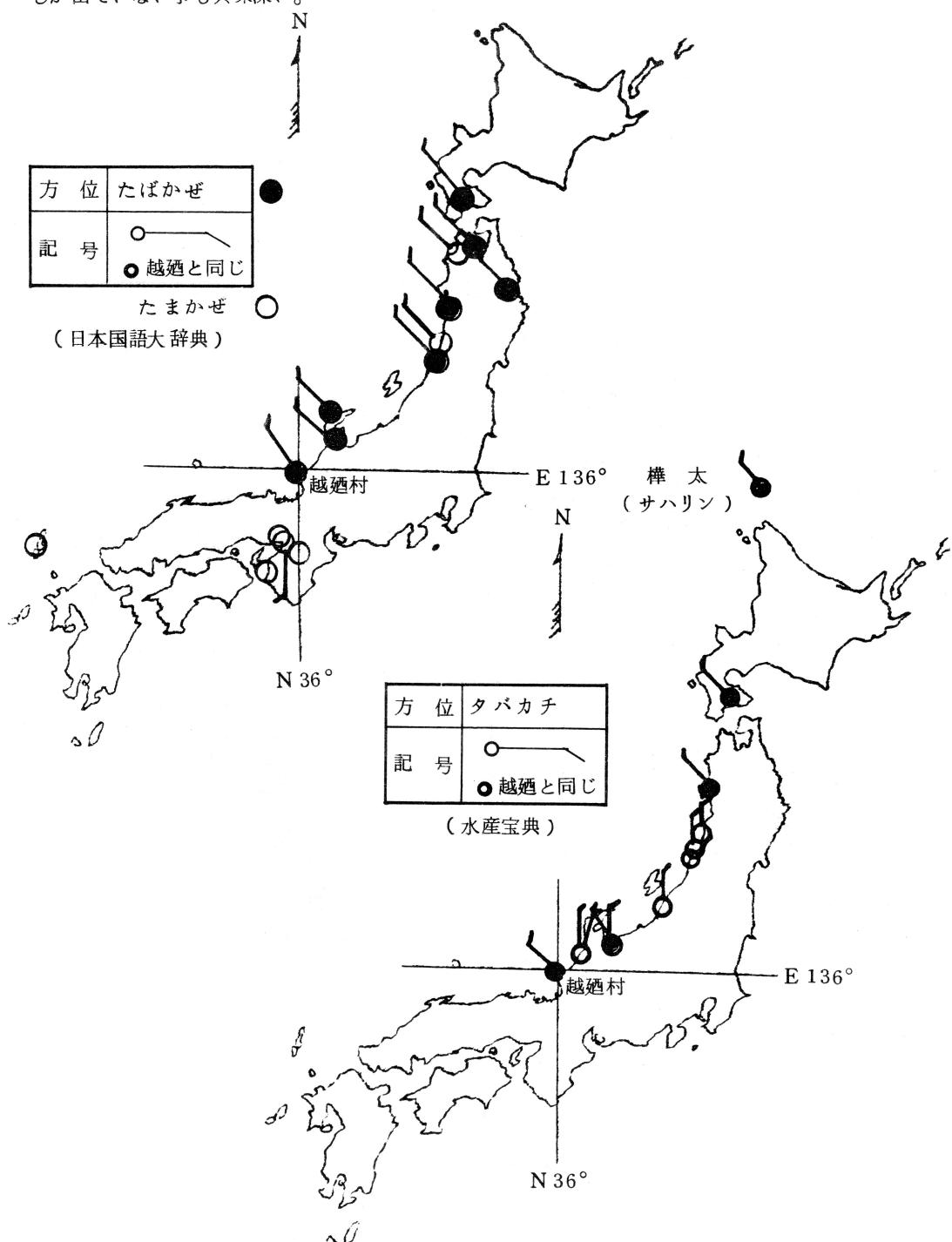
夏に多く吹く北東風で、アラシ（嵐）（東風）とまちがいやすい風である。ヤマセよりも弱く出漁が安心してできる。秋口にも吹く。



全国的に見てアノイカゼの語は日本海沿岸で用いられた風位名である。このことは、水産宝典及び日本国語大辞典で示された風位を地図上に書き入れることにより一層はっきりしてくる。更に注意を引くことは、略 越前の国より以北に用いられ同一風向となっていることに気づく。このことは、北海道航路或は交易の繁かった事を表しているのではなかろうか。越前町の風位（昭和8年調査報告）でも北方よりの風を、アヒカゼ、マカゼ、五月アイと呼んでいる事からも知ることができる。



このことについては、タバカゼについても同じように言え、タバカチという名称が、越前以北にしか出ていない事も興味深い。



2. 南方よりの風

南													方位	
南 南 西	西南 西	南 西	南 西	南 西	南 西	南 東	南	南	南	南	南	南	風向	
オ キ ナ ガ ス (沖 流 す)	ワ カ サ	カ ミ シ ラ バ	シ カ タ	カ ミ オ キ ゲ (上 沖 げ)	カ ミ ダ カ (上 高)	カ ミ ニ シ (上 西)	ガ ミ イ ソ (上 磯)	ガ ス ク ダ リ (ガ ス 下 り)	ア マ ク ダ リ (真 下 り)	マ ク ダ リ (雨 下 り)	カ ミ カ ゼ (上 風)	カ ミ カ ゼ (下 り)	ク ダ リ (下 り)	風位名
春夏	春	春夏	春秋	秋冬	冬 秋 に か ら け て		春	年中	年中	年中	年中	年中	季節	
								春 に 多 い	四 多 い 九 月	用 冬 に る 多く	用 夏 に る 多く		月	
梅 雨 用 流 すす			(南 風) シ カ タ	カ ミ オ ッ ケ			デ カ ゼ (出 風)			ツ ル ガ モ ン			風位別名	

クダリ

一般に南風の総称で夏に多く用いる語。

カミカゼ

カミ(上一南)の方から吹いてくる風。クダリと同様 南風の総称で冬に多く用いる語。

マクダリ

真南より吹いてくる風。出漁中、沖合いでこの風が吹いてくるとツルガモンと呼ぶ。敦賀の方から吹いてくる風。風いでいた海がだんだん時化てくる前徴の風である。春ならば此の風が吹いても大時化にならずやがて風もおさまり雨も降りやんで、オキゲ(真沖より吹いてくる風=西風)にかわって行く。しかしその度合によっては波・うねりが出てくる。冬のマタグリは、風雨がやんだ後は大時化になる。春秋に多い風。春の場合は海面にホケが立つが波はできない。9月台風時期は春とは激しい。越廻の沖合では、南風がやがて西にまわってカミニシの風となりニシカゼとなり北方の風にと変って行く。北西の風になる頃波が大きくなる。

マクダリが吹く時はアマウチモンは吹かない。即 北東風が吹かないということは、南風は東風にならないということである。

アマクダリ

マクダリの風が雨を伴っている場合をさす。年中の風である。時化になるかオキゲにかわる。

カミイソ

シモイソ（下磯）の反対の語 デカゼ（出風）である。蒲生発電所方面より吹く南東風。弱い風で出漁できる。時には波が後刻出ることもあるが大時化にはならない。南の磯の方から吹くから此の名称がある。

ガスクダリ

4月頃、霞のかかった頃に吹く南風。沖にもつ（西風に変る）と風の弱いオキゲになる。凪は良い。

カミニシ

秋から冬にかけて吹く風。2～3月頃の春先にも吹く南西風カミダカよりも強い風で雨が降り、だんだん波が立ち大時化になる。

カミダカ

カミニシより弱い風である。春に吹くこの風をカミオキゲと呼び微風であるがうねりは大きい。秋に吹くこの風をカミダカという。此の風の強い場合をカミニシという。冬の場合は風と波が1気に強くなり西にまわって大時化となる。

カミオキゲ

春から夏にかけて吹く風。小雨を伴って吹きシカタよりも強いが、凪がだんだん良くなってくる。蒲生氣比神社の大漁祝として餅撒神事（もちまき）が古来2月7日に行われ、また例祭は10月13日である。この時はきっと、カミオキゲやシカタの風が吹き、敦賀祭（9月4日）にはアイノカゼが吹いた、という伝説は今も「海と神」の関りを示している。

シカタ

南南西よりの静かな風である。沖は凪ぎ出漁できる。春から夏にかけて朝シカタの風が吹く時は沖が時化する事は全く無い。シカタの風でおきる波は小さく雨は降らない。

朝ヨオマ（北西風）が吹いて夕方シカタ（南西風）が吹くことを、ヨオマシカタと呼ぶ。「朝シカタ 入りヨウマ」が通常の吹き方であるが、その逆の吹き方である。北風が南風にかわる事はあり得ないようであるが、出漁中、沖合でよく起きる現象である。夏に多い。

シラバ

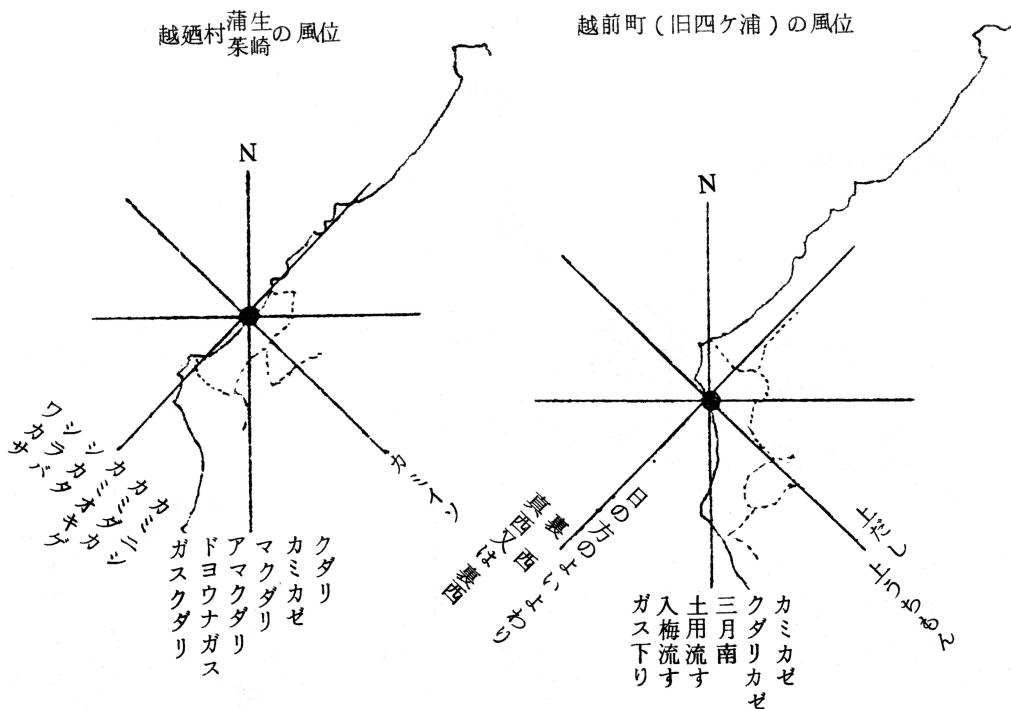
カミシラバとも言い春先の風であるがホケは立たない。

ワカサ

マクダリ（南風）が吹く時はアマウチモン（北東風）は吹かないがワカサ（南西風）が吹くとやがてアマウチモン（北東風）が吹く。午後2時頃、ワカサが吹くとその風はだんだん雨を伴って強くなり波も高くなるから油断するなという風である。

越前岬を南北に境とした日本海の風向・波浪の状態は沿岸部では著しく異っている。特に南西風

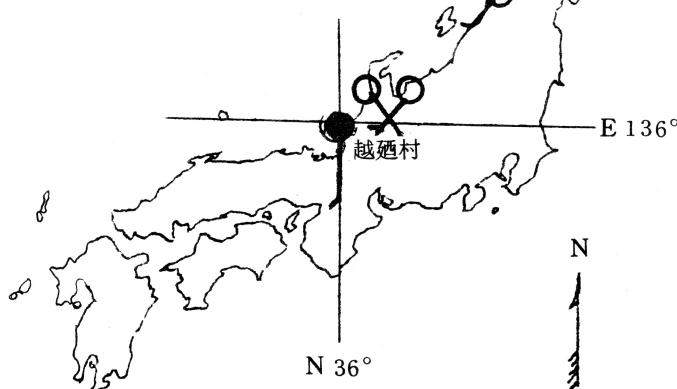
の場合は越前町で波浪が高く越廻村では平穏である。また、ニシ（西）の語も、越前町では西南西をニシと呼び越廻村では西北西と呼ぶのも地形からくる呼び方ではなかろうか。



シカタという名称の全国的分布は日本海に多い南或は南西風の方位に統一すると、中国・中部・奥羽地方及北海道の日本海沿岸のすべてになる。アイノカゼの名称が北陸以北であったのに比して差異のある事は、シカタの風に帆を孕ませた北前船の北上の姿ではなかろうか。越廻村にヒカタという名称は無い。

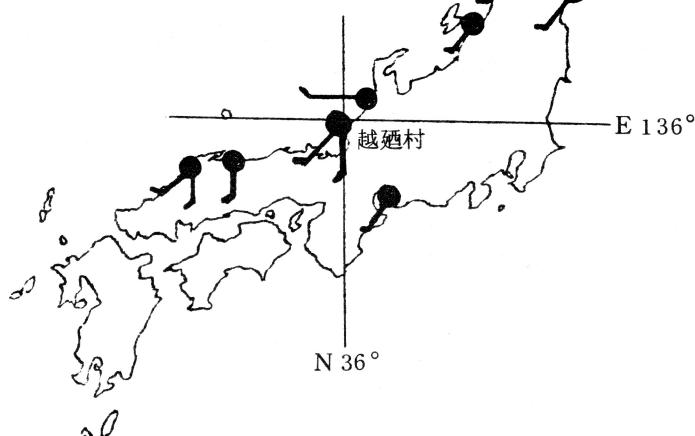
方 位	し か た
記 号	○ 越廻と同じ ● 越廻と同じ

(日本国語大辞典)



方 位	シ カ タ
記 号	○ 越廻と同じ ● 越廻と同じ

(水産宝典)



3. 東方よりの風

東					方位
東	東	東	東	東	風向
				東北 北東 東	又 風の 向
デ カ ゼ (出 風)	ダ シ (出 し)	ア ラ シ (嵐)	イ ソ ゲ (磯 げ)	ヤ マ セ (山 背)	風 位 名
年 中	年 中	年 中	年 夏 中		季 節
					月
					風 位 別 名

但し、北東・南東風は北・南風の項で説明したので省略する。

ヤマセ

季節によって同じ東風・北東風のヤマセでも風波の状態が変ってくる。即ち、風の良い時のヤマセをシモイソともいい、時化の時ヤマセを言う。出山背(デヤマセ)は北東風でありヤマセは東北東或は東風となる。風位の名称は、その船が沖合にいる時、その船が受ける風位をさすこともある。即沖合の船が越前町の沖か越廻の沖か安島(三国)の沖かその存在する位置によって異なる。要は、船と風の関係が大事であって、船と磁針のさす方角との関係は問題でないからである。故に、越前町・安島という異った漁場で風を受けた時の判断は自から異なるものあり、これが漁師にとって最も大切な天気の判断知識・体験となるのである。

夏の山背(ヤマセ)は略、東風で波ができず出漁出来るが、秋になると東北東更に北東風へと移り变つて行く。その移り变りは、風力を加えるということである。ヤマセによって起きる波は、風の割合に波は大きくならない。しかし時と共に波は高く大時化になる。風力の割に波の高くなるより、風力の割に波が小さい事が油断の原因となり遭難する事が多い。どの季節でもヤマセは強い風であるが、海面にホケは立ない。

イソゲ

磯げ 山から吹きおろす東風である。越廻の海岸線は、北東・南西を結ぶ線であり東は北西・南東を結んだ線上に取らなければならない。故に山から吹きおろす風とは南東風のことである。この風は山から吹きおろす関係上、磯の方に波はできないのみか沖合にも波を生じない。

「ゲ」について

「ゲ」とは感じという意味を持っている。磯げ、冲げ(上磯げ、下磯げ、上冲げ、下冲げ)などがある。どちらも、磯の方に波がある感じ等、微風である。

アラシ・ダシ・デカゼ

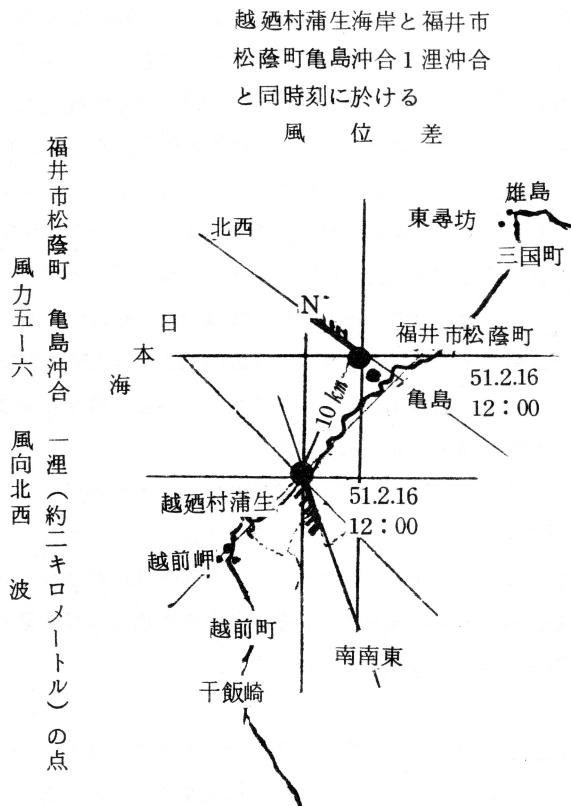
嵐・出し・出風、何れも東風で風向・風力共に似ているので差はつけにくく、人それぞれが風を表現する語である。即、アラシと言う人もあるれば、ダシと言う人もある。しかし大別すると沖合で感じた時と陸岸で感じた時とによって名称が異ったようである。

陸岸にいる時はアラシ、出漁中とか沖合への航行中受けた場合にデカゼ・ダシと呼ぶようである。このことは越廻の地勢に応じた風位という言い方から説明すると、越廻でのダシは波静かで出漁できる日も多いが、石川県金石では大時化となり大変恐れられているばかりか死者のでる事

も多いと越廻の漁業者はいう。又或る人は、シカタ（南風）の風は越廻で出漁できる良い風であるが、石川県金石から能登にかけては大時化となり船の遭難も多く恐れられているという。

方角でいう矢羽根の風向は一定であっても陸岸と沖合とでは大きく異っている事がある。

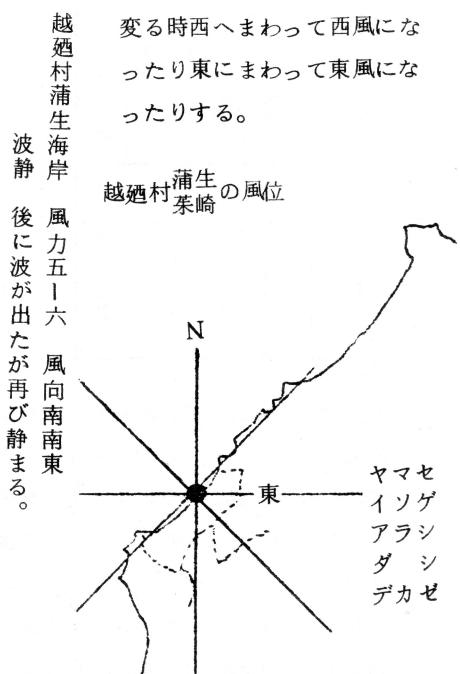
一例として、昭和51年2月16日正午の状況



東風は突然吹き出すものではない。

南風が吹きその風が北風に
変る時西へまわって西風にな
ったり東にまわって東風にな
ったりする。

越廻村蒲生の風位

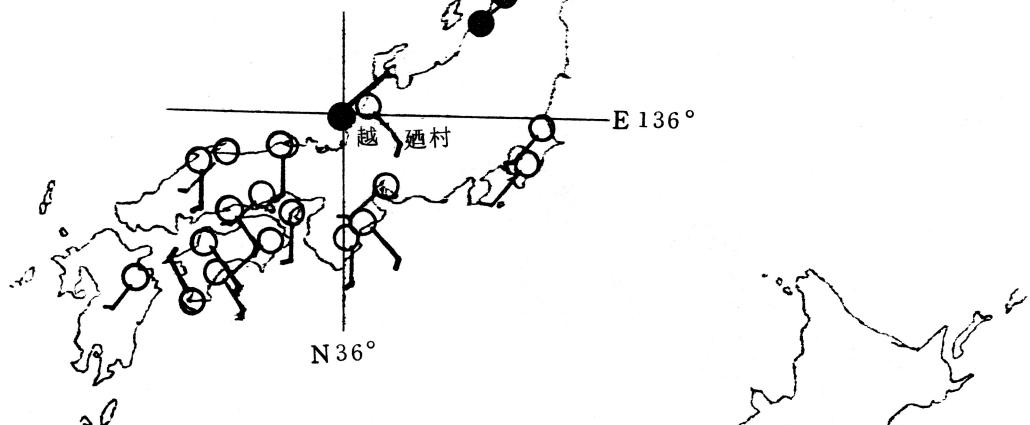


ヤマセという全国的同一名称分布は非常に広い。山を背にして吹きおろす風という意味（日本国語大辞典語源説）からか此の名称が統一されたのかも知れない。瀬戸内海方面にはヤマジという語があるが、越廻ではヤマセの語しかない。

方 位	や ま せ
記 号	○ 越 酒 と 同 じ

(北東とした場合)

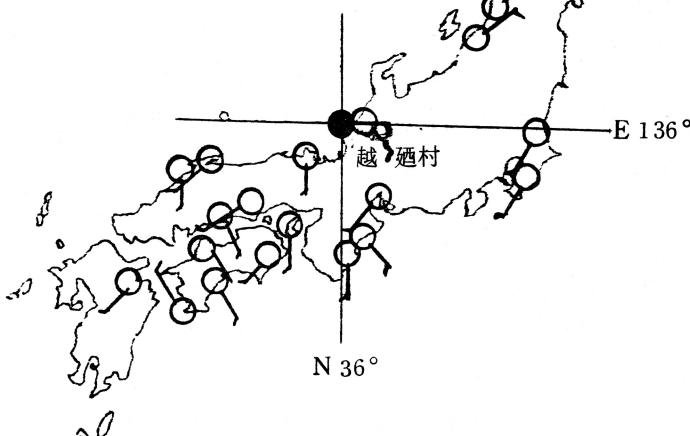
(日本国語大辞典)



方 位	や ま せ
記 号	○ 越 酒 と 同 じ

(東とした場合)

(日本国語大辞典)

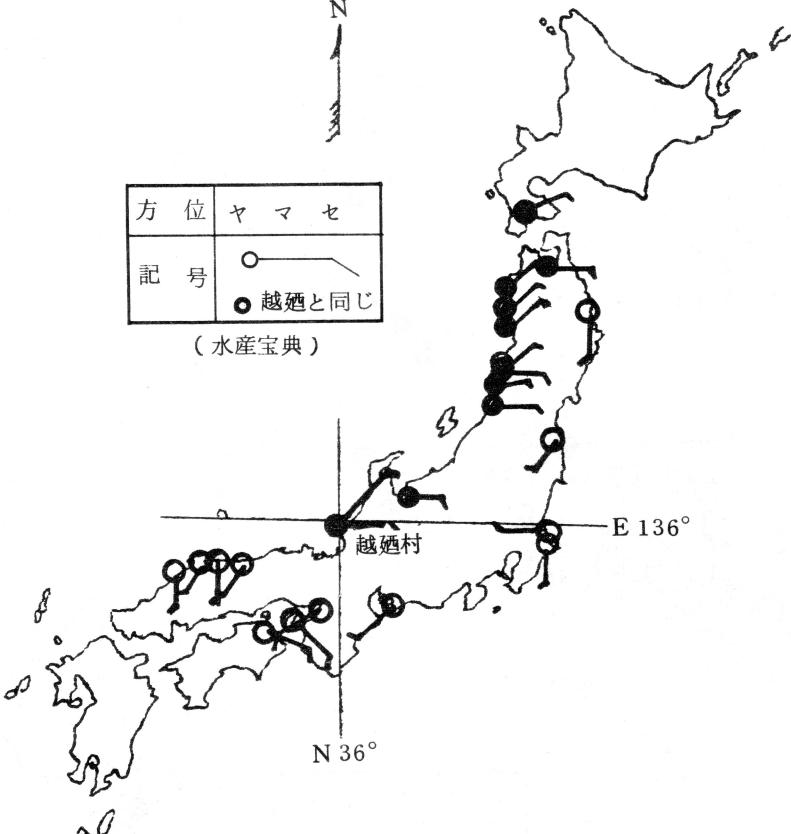


樺太
(サハリン)

N

方 位	ヤ マ セ
記 号	○— ●越廻と同じ

(水産宝典)



4. 西方よりの風

マニシ

冬は通常カミニシ(上西一南西風)の風が変ってマニシにと
移って行く。カミニシの風で高くなつた波はマニシの風・陸岸
に直角に進行する風を受けて一層高くなる。越廻村の漁船・民
家に被害を大きく与える風である。防波堤ができるまでは漁船
の流出・家屋浸水・破壊が多かった。ニシ・ニシカゼとも呼ぶ
が、マニシの方が激しい。即「マ」は「真」の意味よりも「語
意を強める」ものである。「春と冬はニシカゼになつたら商売
にならん」全く危険な風である。春・冬の南風(カミカゼ・マ
クダリ)が吹くと必ず西へまわって大時化となるからである。
春の風向の移り変り方は、南風がやがて上高(カミダカ=南西
風)となり波と共に雨が降り始め、上高は西風となり暴風の後

西				方 位
西	西	西	西	風 向
シラバ	オキゲ (沖 <small>レ</small> げ)	タカカゼ (高風)	マニシ (真西)	位 名
冬	夏	年 中	冬	季 節
二月頃	四月頃 から八月		十二月 から一月	月
				風 位 別 名

に大時化となる。やがて下高（シモダカ）になる。下高になると風は劣るがうねりが残る。「
凧になりそうで沖のながない風」それが北西風である。

しかし、4月から8月にかけてこの風はどの方角から吹いても出漁できる日が多く大時化にならない。6月8月の間は殆ど出漁できる。9月以降は、台風シーズンと重なって風波が激しく細心の注意が必要である。

タカカゼ

沖の方から吹く「オキゲ」とは風力も弱い。雨を伴う風名で年中用いられる。雨が降り止むと風向は南北・何れから移り変っている。下へ行けば、シモダカ、上へ行けばカミダカで、天気は回復し晴れ間がでてくる。夏のタカカゼはそれ程波も出来ないので操業を続行できるが、冬のタカカゼは勿論9月以降は操業できない。即、タカカゼと呼ぶ風力でなく、ニシと呼ばれる風力だからである。

オキゲ

おだやかな凧の良い日、沖合から吹いてくるニシカゼで操業できる。一般に春は波も高いが夏になるにつれて波も低く風の悪影響はない。最初、微風の南風が雨を伴って吹きやがて雨がやんでオキゲに変わる。この変化を「オキネモチ」と言い凧は良い。

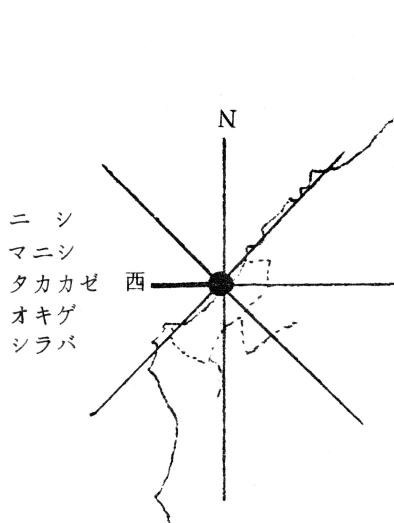
雨がやんで西に風が変わった頃、海上一面に霞がかかってくることがある。こんな日は、ニシカゼになっても北西の風にと移り変らずいつか吹きやんてしまう。のたりのたりとした春の海である。

シラバ

雨が降らず風だけ強い。海面にはホケが立つ。やがておだやかな海面に波が立ち大きくなる。

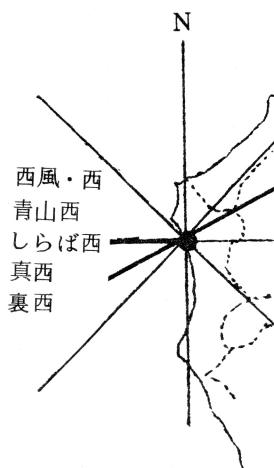
2月頃のシラバは大時化の前兆である。

越廻村蒲生の風位
茱崎



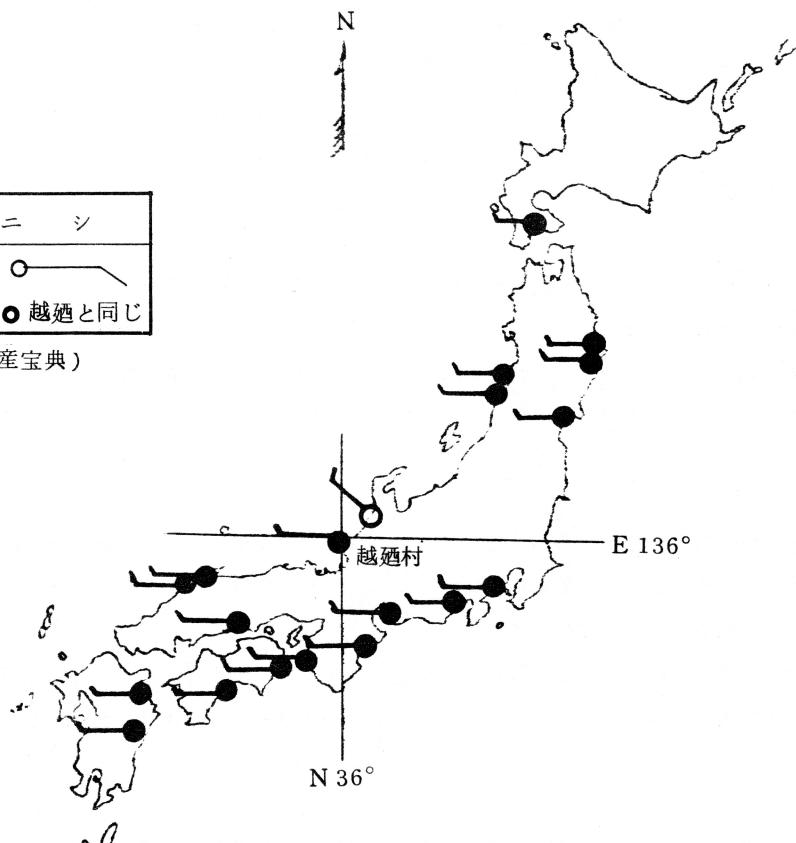
越前町(旧四ヶ浦)の風位

全国的に、ニシ、
或いは、ニシカゼと
呼ぶ名称が多く、日
本海側よりも太平洋
側に多い事が目立つ。



方 位	ニ シ
記 号	○ 越廻と同じ ● 越廻と同一

(水産宝典)



越廻村と同一風位名を用いる県

水産宝典

大日本水産会編

大正5年5月30日発行

北													風向			
北東	北東	北東	北西	北西	北西	北西	北	北	北	北	北	北				
アマウチモン	シモイソ(下磯)	デヤマセ(出山背)	シモシラバ	シモタカ(下高)	タバカセ	シモオキゲ(下沖げ)	シモゲ	シモカゼ(下風)	ヨオマ	マカゼ(真風)		アイノカゼ	風位名			
					タバカチ	シモオッケ						アイノカゼ	風位別名			
石川	ウチモン				石新川潟・富山	秋田・山形					石川	北京府・島根県	富山・鳥取	新潟・佐渡	青森・秋田	同一する呼び方

南														
南 南 西	西 南 西	南 西	南 西	南 西	南 西	南 東	南	南	南	南	南	南	風 向	
オキナガス (沖流す)	ワカサ (若狭)	カミシラバ	シカタ	カミオキゲ (上沖げ)	カミダカ (上高)	カミニシ (上西)	ガスクダリ	アマクダリ (雨下り)	マクダリ (真下り)	クダリ (下り)	カミカゼ (上風)	カミカゼ (下り)	風位名	
							デカゼ (出風)				ツルガモン 敦賀もん		風位別名	
	石川			ヒカタ 北新青愛石 海潟森知川 道...							石川	秋田 岩手 新潟 石川 樺太	同一呼び方をする県	
				富秋宮島 山田城根 ...										
				山岩 形手										
西							東							
西	西	西	西	西	風向		東	東	東	東	東	東	風向	
シラバ (沖 げ)	オキゲ (高 風)	タカカゼ	マニシ (真 西)		風位名		デ (出 風)	ダ (出 し)	ア (風)	イ (機 け)	ヤマ (山 背)		風位名	
			ニ シ		風位別名								風位別名	
		石川	島根 青森 千葉 高崎 葉知 和歌 大分 山城 宮静 岡和 神奈 川香 川香 川重 三重	島根 青森 千葉 高崎 葉知 和歌 大分 山城 宮静 岡和 神奈 川香 川香 川重 三重	同一呼び方をする県								同一呼び方をする県	

あとがき

1. 越廻の漁民が藩政時代より用い、又、思考し蓄積しつづけたであろう風位は陸岸にあって沖合の気象を推測させた。陸岸には背部に4～500mの越廻の山嶺が急坂にそそり立って続き、その奥に深い谷と高い峯を交錯させつつ丹生の山塊が広大にひかえていた。その山嶺に気流は乱れ、風向は転々として幾多の変異を見せた。地上の風と上空を流れる雲行きから気温の変化と風浪の変化を読みとり、760ミリメートルHgのアノロイド晴雨計の針が上がったとか、下がったとか、ひっくり返ったとかいう会話は生死を別つ生業へのきびしい対決であったにちがいない。まして出漁中に受ける風は、陸岸の波浪を予測させ、操業を続けるべきか切りあげるべきかという一刻を争う決断を漁民に要求した。全智全能の結集が風位の名称を形づくった。
2. 風位の伝承を求めて村内古老を巡り、個々が保身の業として確立した天気への繊細な知識と適切な判断と果敢な決断とには唯々敬服するばかりであった。その極限は歴史の上に立った「生活の智慧」と片付けるにしては、余りに現実・現世的で涙ぐましく、自然の征服とおごり高ぶる人間ではない自然融合の人間である漁民を発見した。「海と寄り神」恵比須信仰の故事を見せつけられる感じがした。融和と妥協を現代の世人は混同しがちである。これこそ甘い物質文明におぼれた対人関係の所産と処世術かも知れない。漁師の「今日は乞食明日は旦那」という収量不測の生産と舟板1枚下は地獄という生業から殺刑主義的人生観と漁師を評するには余りに酷であり、現世の「人の波にただよう」人間こそ、切り抜けるべき術を知らない殺別人と言えるのではなかろうか。
3. 風向を学術気象用語とし、風位を漁業者のみに通ずる方言用語に大別するなら、風向は万人に共通する方位で現わされ、風位はその土地にのみ通用する方位とも解されよう。風向は單一であり端的であるが風位は複数であり意味深長である。それだけに風位名を文字にし平文化する事は非常に困難であり表現に苦しむ。文字にし難いものを文字にした時読者はその表現のみを理解し数学的・気象学的現代頭脳で結論を求めようとするだろう。風位を解するには、内に、その土地の歴史的背景・漁民感情・表現能力、そして、外に、山塊・平地・河川・港湾・潮流・岩礁等の地勢立地条件を熟知しない限りそれは不可能ではなかろうか。平文化した時読者が、生活経験の基盤もなく安易に理解し割り切って結論を出したとするなら、それは危険な結論というより、風位語を産み出した祖先への冒瀧ではなかろうか。
4. 日常語として用い耳にする風位を安易に考えまとめようとした自分の何と尊大であり愚であった事か、九牛の一毛も知り得なかった自分は、再びその愚を繰り返さない為にも表題に反して、風位の考察を差し控えたい。
5. 今後更に漁民の生活経験・年中行事・伝説を収集しつづけ、櫓・櫂と帆布を操つて遙か異国沖合に小舟で赴き数日を洋上で過し操業した氣骨と、行雲流水に全知全能を働かせた生業（なりわい）の執念を記録しつづけたい。
6. 個々の風位名が持つ経験的な意味とお互の関係は容易に理解し得るものではないが、少なくともその風位名が越廻及びその周辺という狭い地域ではなく、日本全国につながりを持っているも

の、海流或は交易によってつながりを持っている姿が推察された。今迄、風位名は越廻とその周辺に残された方言と思っていた自分にとって大きな驚きであった。漁民にのみ通用する言葉という意味から敢て方言と呼ぶなら、この広範囲な風向方言は他の日常方言に見られない用語ではなかろうか。最早それは漁民の共通語、或は共同体としての生活語ではなかろうか。その経路は、大和国三輪山をめぐる「山の辺の道」を想わせ、古代人が大陸とつながる海の道、更に、日本海沿岸の各地に交流する文化産業の道を想わせた。共通する民話伝説が示すよう有機的なこの関係は共通する風位名の中から、単に風の方角・強弱を現わすのみならず、語源的価値を示してくれるにちがいない。

7. 同一風位名であってもその風向はその地域特有のもので他国とは大いに異っているものもある。改めて風位は風向・風力のみを現すのでない事を知り「やまとことば」としての意味を何等かの形で残し宿していると考えられる。

民俗学者の柳田国男はその著の中で風位考を記し、今後更に調査研究にまつといわれている。その指針こそ今失われつつある漁民の言葉「風位」に寄せる愛着と今後への道標を示されているのではなかろうか。

(越廻中学校)